33

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

111年06月07日 11：42：22

入館証番号：

＜請求票＞
Call Slip

3892
6

資料名： 支那人の精神

巻次：

著者名： 辜鴻銘‖著

出版者： 目黒書店　頁数 ： 213p

大きさ： 19cm　出版年： 1940

所蔵館 ： 中央

所蔵部署 ： **1階資料お渡し・返却カウンター**

配置場所 ： 1/261 中)2F社会(閉)

資料ＩＤ ： 1126270972

一 社 人 自 東 新 ↓ 一 社 人 自 東 新		力	事
		請求	報告
MB１ ﾏｲｸﾛ	B1 ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ 原紙 縮刷		
MB２ ﾏｲｸﾛ	B2 洋 中 朝		
行 1F B1 B2			
多 児 青 1F B1 B2			

切り取り

入館証番号：

111年06月07日 11：42：22

Call Slip

＜請求票＞(控)

書名
資料名： 支那人の精神
巻次 ：
著者名： 辜鴻銘‖著
出版者： 目黒書店
出版年： 1940
大きさ： 19cm
頁数 ： 213p

所蔵館 ： 中央

所蔵部署 ： **1階資料お渡し・返却カウンター**

配置場所 ： 1/261 中)2F社会(閉)

資料ＩＤ ： 1126270972

請求記号
3892
6

る。前者は秩序と整頓を意味するが、後者は只孤立的な自己充足のみを意味する。前者は協和音を意味するのに對し、後者はただの單音である。前者は全體であるのに、後者はただ部分に過ぎない。」

これこそはヨーロッパの國民、目下交戰中の諸國の國民にとつて、今回の戰爭から逃れるためばかりでなく、またヨーロッパの文明を救ひ、ひいては世界の文明を救ふために唯一無二の道であり、それは結局彼等が現在有する自由の大憲章や憲法類を破棄して新たなる大憲章——自由の大憲章でなく忠誠の大憲章を制定することであり、つまり我々支那人のもつ如き良民の教へをその忠誠の大憲章と共に採用することである。かくして新たなる時代より秩序は生れ出づるのだ！

支那人の精神 終

譯者追記

この本は昭和十五年の夏、學校の休を利用して譯出したもので、近年にない暑さと身邊の雜事に煩はされながら、私は晝なほ暗い自分の小さな書齋にともかく籠り通すことができた。かうして本になりかけたのを見て、僅かながら義務を果したことの喜びを感じる。

辜鴻銘の日本滯在中のことについては充分な調査もできないでゐたが、最近譯者の勤め先の一つである大東文化學院の當局者の御厚意によつて、他に得られない珍しい寫眞（本書口繪のそれ）を貸していただくことができた。また雜誌「大東文化」の舊冊を繙くことによつて、原著者に關する新たな事實をも知り得たので、その要點を左に追記しておかうと思ふ。

大正十三年七月及び九月の「大東文化」誌に辜鴻銘の論文『支那文明の復興と日本』が出てゐる。その中で彼は日支兩國の關係を巧妙な譬喩によつて解說し、

『今日の日本人は實は唐朝の流れを汲む眞の支那人である。蒙古（元）の侵入によつて唐朝以來の眞の支那文明の粹は僅か江蘇浙江地方を除いては支那本土から姿を消したのである

が、それが日本にはそのまま保存されてゐる。而も日本こそは、東亞において西洋人の蹂躙を許さなかつた唯一有力の國家である。ではその日本と支那との間柄が何故圓滿に行かぬのかと言へば、それは恰も「親の殘した寶を爭ふ兄弟」の如く、又曾てのイギリス人とフランス人との關係にも似てゐる。しかし支那こそは日本といふ美しい花を咲かせた所の土である。日本が歐洲現代文明の利器を應用するのは大いに結構であるが、それには東洋的道德心を以つてし、この花と土とを共に護らなければならぬ。』

といふ意味のことを述べてゐる。この年の九月、朝鮮來遊を機として、大東文化協會から招聘されることになつたが、彼は直ちにこれを快諾、六十八歳の老軀を挺して十月十日に入京、山本悌二郎氏、酒井忠正伯、其他各方面から熱烈な歡迎を受けた後、東京、京都、大阪、神戸、濱松等、各處に席の溫まる暇もなく連續講演を試み、十一月十六日、臺灣に渡るために一先づ離京した。この時の演題は、「文化とは何ぞや」「支那文明の史的進化」「日本の將來」（以上大東文化協會）「東西文明の異同を論ず」（東京商工奬勵館）「ポリチカル・エコノミーの眞諦に就て」（大每講堂）の五つで、――これらは雜誌「大東文化」にも登載せられ、またその時の通譯者山縣五十雄氏の手で纒められて、「辜鴻銘先生講演集」として大正十四年一月、大東文化協會から刊行

された――その最初の講演の際に辜氏は自己紹介をして次の如く述べてゐる。

「私は支那に於ては歐洲教育を受けた者の中では最古參者であることを自ら諸君に御報告いたします。そして、英、獨、佛、伊と四箇國語を研究しましたし、些少ながら、拉典、希臘の兩古語をも學んだ者であります。新時代の新事物に關することならば、烏滸がましくはありますが、孫逸仙などよりは、少しは十分に心得てゐる積りであります。ですから結論として、私は勿論舊支那黨の人物でも新支那黨の人物でもないと申上げ得られようかと存じます。然らば、お前は何黨の人物かと、諸君よりの御質問があることで御座いませう。私は即座に、『予は眞の支那黨に屬する者である』と御返答に及びます。」

而して彼はそのいはゆる「眞の支那黨」の棟梁的人物として曾國藩や張之洞を擧げ、これに反して李鴻章の如きは只の事務官であり、康有爲は藝者だと貶してゐる。

臺灣から支那に歸つた辜鴻銘は、旅の疲れや感冒のため翌年の早春になつてもまだ靜養を餘儀なくされてゐたが、日本とは斷えず連絡があつた。「大東文化」大正十四年五月號には論文「支那文化を研究せんとする歐米人に與ふ」及び譯詩「壯士詞」が見えてゐる。この論文は、支那語支那文學を研究せんとする歐米人が、物質主義の傲岸さを捨てて眞の人間價値を認識する

ことの必要を説いたもので、彼は、「金儲けと支那語支那文學の研究は兩立し得ない」と述べ、「若者よ、高貴なる魂と眞實なる仕事を予より學べ。榮譽を得ることは他の徒輩より」といふラテンの名句を引いて學徒への贐けとしてゐる。

十四年の春、再び來朝した辜鴻銘は、五月初旬東京の講演を始めとして、二十日より二十八日まで東北五縣に巡回講演を續け、各地とも聽衆は堂に溢れた。偶々この頃、「奉天の大元帥」張作霖が辜鴻銘に目をつけ、その政治顧問に招聘したいといふ話があり、辜氏も一應滿洲に赴いて張に會つて來たが、七月の中旬にはもう東京に歸つてゐて、大東文化協會の夏期講演會に臨み、「政治と社會との道德的基礎」といふ講演をした。それ以前(「大東文化」大正一四・七月號)にも言つてゐるやうに、彼の見る所では、「東方文明は既に完成せられたる建築物であり、これに反して現代歐洲文明はまだ未完成の建築物」である。而して「今日歐洲人が熱望する所の民主的文明とは實に支那人が二千年來保持して來た所の文明に外ならず、この民主的社會の理想は我等が我が東方文明に於て王道と稱する、即ち道德的君主を推戴する政治である」といふ。

彼はまた日本の政治に論及し、

「日本の官僚政治は今日の日本の建設に對して世界の如何なるそれに於ても見られなかつた

驚嘆すべき功績を過去に殘したが、しかし、かくの如き驚嘆すべき官僚政治を以つてしても、日本の民衆をして自ら治めしめ、政府を要せずして自ら社會生活を營んで行けるやうに彼等を敎育するといふ目的においてはやはり失敗であつた。更に忌憚なく言へば、半世紀に亙る官僚政治の結果は、曾て二千年の昔に我々支那及び支那民族が嘗めた苦い經驗に近いものを今や新興日本の民衆が、そのあまりに多くの支配を受け過ぎてゐるといふ事實に於て明らかに看取することが出來るのである。而して今日の日本にとつて眞に危險なものは、一部の知識階級の言ふ如く軍國主義ではなくて實に官僚政治であると斷言するに憚らぬ」

と言つてゐる。

この夏の講演の後も、辜鴻銘はなほ大東文化協會の比較研究部員として屢々その蘊蓄を披瀝し、「支那文明の眞價」(「大東文化」大正一四・一一月號)、「支那古典の眞精神」(同大正一五・三月號)等の論文を發表してゐる。前者においては、「我々東洋人は西洋人から差別待遇されても、その暴に報ゆるに暴を以つてせず、只彼等が獨りでに東洋文明及び東洋人の眞價を理解するまで待つのが賢明である、何となれば、エジプト、バビロン、ヘブライ、ギリシヤ等々、文明の數は多いが、上下數千年に亙つて不滅の光芒を放つものは獨り我が東洋の文明のみである

から」と說き、後者においては、「歐米の徒輩は動もすれば支那の學問には進歩といふ概念が足りないと考へてゐるが、實はその反對で、支那の古典的學問に表現されてゐる支那文化の眞精神は秩序と進歩とである。歐米人の誤謬は、秩序、とりわけ道德的秩序なき進歩を欲求してゐることである」と述べてゐる。

以上、辜氏の日本滯在中の事柄を記錄に基づいて摘出したのであるが、なほ一二、彼の身上に關して附記しておかう。

年少十三歳にして、一スコットランド人に伴はれてヨーロッパに赴き、エデインバラ大學を優等の成績を以つて卒業し、更に獨佛伊等に遊び、弱冠二十三歳の頃にはもはや堂々たる新知識として大清帝國の檜舞臺に立つた辜鴻銘、――その彼が後來張之洞等に師事して儒學を專攻したについては、すでに方法論において、かの訓詁註釋のみを唯一の賴りとする支那在來の一部の學者とは大いに選を異にしてゐたことは言ふまでもない。而も彼が、多くの洋行歸りの支那人とは異なり、決して必要以上の西洋化に陷らなかつたことは、何も辮髮保存の一事が證明するのみには止まらないであらう。同じく「支那學」とは稱しても、單に機械的な訓詁註釋の

累積のみを以つて貴しとし能事了れりとする者に比較すれば、彼の如く、精神はあくまで自己の所屬する國家の典型的一員であり、方法においては洋の東西を貫く普遍妥當的なるものを把握し、範疇に關しては最もよく對象に卽應し得るものを立てることを心掛け、而もその表現においては切々知識人の胸を打つ新時代の言葉を以つてしてゐる點、とかく乾燥無味に陷りがちな日本人の學的態度にとつて正に頂門の一針であらう。

終りに、辜鴻銘がその人を通じて「日本人の精神」を深く知ることの出來た日本婦人――芥川龍之介の文にも出てゐる辜氏の夫人故吉田貞子女史――に絡まる一つのエピソードを加へよう。

寫眞にも見えるとほり、辜氏の左手の藥指には簡素な金指環が嵌められてゐる。これは奥さんの貞子さんが辜先生の舌禍を憂へて、萬一の戒めとして嵌められたものださうで、「あなたはお喋りが過ぎます。どうしても言はずに居れない時でも、先づこの指環を御覽下さい」と言つて贈られたのださうである。この夫人との間には息子さんもあつた由であるが、どうしてをられるのであらうか。

（昭和十五年十一月二十日）

支那學（その一）

あまり以前のことではないが、或る宣教師の團體が、學術的な冊子類の表紙に自分たちのことを「宿儒」と銘打つて出したので非常な話題になつたことがある。勿論これは突飛極まる滑稽な話である。支那全國を捜し廻つてみても、自分自身を「儒」と僭稱するほどに心臓の強い人間はないであらう。儒とは學者文人最高の稱呼だからである。ところでヨーロッパ人には屢々支那學者と呼ばれるものがある。「チャイナ・レヴュー」の廣告する所によれば、「宣教師の間では高遠な支那學が熱心に開拓されてゐる」のださうである。そして特約寄稿家の名前が並べ立ててあり、「いづれも各自の題目に關しては權威者であり、充分にその蘊奥を究めた知名の大家」だといふことになつてゐる。

ところで、在支宣教師團體によつて熱心に開拓されてゐるといふその高遠なる學問を測定するには、何もあのドイツ人フイヒテの文人論やアメリカ人エマースンの文學倫理の中に述べられてゐるやうな高遠な理想を持出すまでもないのである。故駐獨米國公使テーラー氏の如きは

偉大なるドイツ學者として認められてゐたが、しかし、シラーの戯曲を二三讀んだり、ハイネの詩の譯を雜誌にのせたことがある位のイギリス人が、その漫談仲間の間ではドイツ學者と思はれることはあつても、その名前が活字になつたり廣告に出たりすることは先づなからう。しかるに支那にゐるヨーロッパ人たちの間では、何處か或る地方の土語による會話書を出したり、或は諺の百も蒐集すれば、その男は忽ちにして支那學者で通るやうになるのである。勿論、肩書に害はないのだし、條約では治外法權條項を持つてゐるのだから、在支イギリス人は誰でも皆自分の好みに從つて、俺は孔子だと言つても平氣なわけである。

我々がこの問題を考へるやうになつたのは、一部の人々の間において、支那學はもはや初期の開拓期を過ぎ、乃至は目下過ぎつつあり、今や新しい段階に入らうとし、學者がもはや辭典編纂及びこれに類する基礎工事に甘んぜずして、構築的な工作、例へば支那國民文學の完全なる標本とも言ふべきものの飜譯などが試みられ、支那文學の殿堂に祀られてゐる人々に對して理智と公論とに基づいた判斷を、而も決定的判定を下すべき時機に臨んでゐると考へられてゐるからである。我々はここに次の諸點を檢討するやうに提議したい。第一には、ヨーロッパ人の支那語知識がさうした變遷を遂げてゐるといふのは果してどの程度まで眞實であるか。第二

には、今まで支那學の分野において何事がなされてゐるのか。第三には、現今の支那學界の實狀は如何。而して最後に、支那學の將來かくあるべき姿を指摘してほしい。諺に、巨人の肩に立つた一寸法師は自分を巨人以上に大きいものと考へるとあるが、それはともかくとして、一寸法師は彼の立場を利用すれば巨人にもまさる展望を擅まにし得るといふことは否めないであらう。そこで我々も、先人の肩の上に立つことによつて、支那學の過去、現在及び未來を展望してみることにしたい。さうすることによつて、もし先人に對して全幅的には賛成しがたいやうな意見を吐くことになつたとしても、さうした意見は決して我々自身の優越を誇示せんがためのものとは解釋されたくない。我々はただ自己の立場の優位を主張するのみである。

そこで第一に、ヨーロッパ人の支那語知識が變化したといふことであるが、これは今までだけについて言へば事實である。支那語を一通り習得するについての困難の大部分は除かれてゐる。ヂヤイルズ氏も言ふ如く、「單に支那の一方言についてでも、その會話言語を習得することは非常に困難であるといふ舊時の通念はもはや昔を偲ぶ語り草の一つに過ぎなくなつた。」否、更に文章言語の場合においても、イギリスの領事館勤務に當る留學生の如きは、北京に二年住み、その後一二年何處かの領事館にゐれば、もう普通の往復文書の大體の意味ぐらゐは即座に

分るやうになる。從つて在支外國人の支那語知識がこれまでに變化してゐるといふことは我々も直ちに承認する所である。しかし、それ以上に何が論議されてゐるかといふことになると、我々は頗る疑はざるを得ない。

初期の耶蘇會士の後を承けてモリソン博士の刊行した有名な辭書はその後の支那學界の一切の業績の出發點であつたとも見られよう。この著述はたしかに、初期の新教宣教師たちの眞摯、熱心及び良心的態度の記念塔として殘るものである。モリソンの後に現れた一群の學者たちの中ではサー・ジョン・デーヴイスとグツツラフ博士が代表的なものであらう。サー・ジョン・デーヴイスは實のところ支那語を全く知らず、彼自身もそれを正直に告白してゐる。もつとも彼は官話を話し、官話方言をもつて書かれた小說ぐらゐは大して苦しまずに讀めたであらうが、しかし當時の彼が有してゐたそれ位の知識ならば、今日では何處かの領事館の通譯さへも勤まらないのである。にも拘らず、大抵のイギリス人の支那人觀は、今日に至るもなほサー・ジョン・デーヴイスの支那に關する著作から得られてゐるのは極めて注目に値する。グツツラフ博士の方はサー・ジョン・デーヴイスよりは幾らか餘計に支那語を知つてゐたやうであるが、しかし彼は自分を實際以上に遙かに物知りなやうな顏をして通さうとした。故トマス・メドウ

ズ氏がその後においてグツツラフ博士やこれに類する宣教師ユツク及びデユ・アルドの虚勢を暴露してくれたのはよいことであつた。ところがその後、ブルジエ氏の如きがその近著支那史においてこれらの人々を權威者として引用してゐるのは奇怪である。

フランスではレミユザがあるが、彼はヨーロツパのすべての大學を通じて、支那學の講座を持つた點では最初の人であつた。その勞作については我々は意見を述べるべき立場にないが、しかし彼が世の注目を引いた著書として一冊の小說の飜譯がある。それは「二人のいとこ」で、この本はリー・ハントにも讀まれ、ハントからカーライルに紹介され、カーライルからジョン・スターリングに廻されたが、スターリングはこれに興味を感じ、この本はたしかに天才の作である、但し「支那式の天才」であると言つた。この小說は支那名を「玉嬌梨」と言ひ、頗る愉快な本ではあるが、しかしさうした種類の低級な本の中でも大した地位を占めるものではない。それはともかく、一人の支那人の頭から生れた想念や影像が、カーライルやリー・ハントのやうな人物の心にとまつたといふ事實は、どう考へても樂しいことである。

レミユザ以後にはスタニスラス・ジユリアンとポーティエがある。ドイツの詩人ハイネの言ふ所によれば、ジユリアンは素晴らしい、そして重大な發見をした。それはポーティエが全然

支那語を解しなかつたといふことである。ところでポーティエも亦發見をしてゐる。それはジユリアン氏がサンスクリツトを知らなかつたといふことである。それはともかくとして、この二人が先鞭をつけた業績には頗る見るべきものがあつた。彼等の有する一つの長所は、自國語に精通してゐるといふことであつた。もう一人フランスの學者を擧げると、ダルヴエ・ド・サンドニ、この人の唐詩譯は支那文學の一部門において先人未踏、後人未及の進路を拓いたものである。

ドイツではミユーニツヒのプラツト博士が「滿洲」と題する支那研究書を出してゐるが、ドイツ人の著書の例に漏れず、なかなか手堅い見事な勞作である。その意圖する所は清朝沿革史の闡明にあつたことは云ふまでもないが、しかしこの本の後の方には支那問題に關する研究があり、これはヨーロツパ語で書かれた本の中では出色のものである。これに較べるとウイリアムズの「ミドル・キングダム」の如きはまるで只のお伽噺の本に過ぎない。もう一人ドイツ人の支那學者にフオン・シユトラウス氏があるが、この人は一八六六年來プロシヤに併呑されたドイツの或る小さな公國の大臣であつた。氏は大臣を退官の後、支那學の研究に餘生を送つたのである。その著書には「老子」の譯があり、最近は「詩經」も出た。廣東にゐるフアーバー氏

の話によれば、シュトラウス氏譯の「老子」は部分的には完璧なものださうである。またその「詩經」の譯も頗る精彩のあるものと聞くが、殘念ながら筆者はまだその本を入手してゐない。

以上に述べた學者たちは謂はば最初期の支那學者であり、モリソン博士の辭典の刊行以後の人々である。これが第二の時期になると、先づ二種の標準的な著作が現れてゐる。その一つはサー・トマス・ウエードの「語言自邇集」であり、もう一つはレッグ博士の支那古典飜譯である。

ウエードの作品については、すでに官話以上のものを修得してゐる人々は或はこれを輕視するかも知れないが、しかしこれは依然として一大業績である——その意圖する範圍内においては、從來英語を以つて書かれた支那語研究書の中で最も完全なものである。なほ又、この本は時代の痛切な要望に應へて書かれたものであつた。かういつた本が當然書かるべきであつたところへ、果然、本書が現れ、しかも當時においては勿論、その後においても競爭者を絶つ程であつた。

支那古典の飜譯といふ仕事も亦當時の時代的要求であつたところへ、レッグ博士がそれを完成し、結果は十二冊もの浩翰な大著となつた。この著作は、質的のことは別として、量的には

たしかに素晴らしいものである。かうした大冊を前にしては、ちよつと批評の言葉にも苦しむ次第であるが、しかし正直に言へば、この著述が必ずしも我々を滿足させるものではない。バルフオア氏の言の如く、かくの如き古典の飜譯に際しては、譯者の用ひる用語が大きな役割を演ずることになる。ところでレッグ博士の用語は荒々しい、生硬な、不適當なものであり、處によると殆ど意味を成さないものもある。形式方面だけでもさうであるが、内容に關してはどうかといふに、それには筆者自身が妄評を加へるよりも在廣東のファーバー師の言を藉りた方がよいであらう。氏は言ふ、「孟子に關するレッグ博士の註から見れば、博士は孟子の哲學を理解してゐないことが分る」と。レッグ博士にしても、かうしたものを讀み且つ譯すについては或る程度まで自己の主觀に應じて、孔子及びその一派の教説を互に連絡のある全體として承認し把握しようとするのが當然であつたであらうが、しかも博士がその註においてもまた論説においても、彼が一個の哲學的體系としての孔子の教説の眞意と認めたものを一言半句も漏らしてゐないといふのは奇怪なことである。從つて要するに、これらの古典の價値に對するレッグ博士の判斷は決して最終的なものとしては受取れないものであり、支那古典の飜譯は今後も行はれて然るべきことである。前記二書の出現以來、支那に關する本は澤山出たが、その中の少

數は學問的に見て眞に大きな價値があるにしても、未だ支那學が重大な轉換期に達したことを示すに足るものはないやうに思ふ。

先づ、ワイリー氏の「支那文學註記」(ノウツ・オン・チャイニーズ・リテラチャ)があるが、しかしこれは單なる目錄に過ぎず、この本の文學的價値などは問題にならない。また、故メアーズ氏の「支那文獻便覽」(チャイニーズ・リーダーズ・マニュアル)があるが、これはどう見ても完璧を稱する權利はない。にもかかはらず、この本は依然として偉大である、といふのは凡そ支那關係の本の中でこれ位に謙虛で良心的で、空威張りをしてゐないものはない。その有用なこともまた、トマス・ウエードの「自邇集」に次ぐものである。

更に一人注目すべき支那學者は英國領事のハーバート・ヂヤイルズ氏である。恰も初期のフランス支那學者たちの如く、ヂヤイルズ氏も亦明晰潑剌流麗な文章を擅まにする才能に惠まれてゐる。およそ氏の取上げるものは忽ち明徹燦爛たるものになるのである。もつとも中には一二の例外があり、氏の選んだ題材にしてはつまらないものもある。その一つは「支那書齋綺談集」(ス・ア・チャイニーズ・ステューディオ)で、これは支那文からの飜譯の一つの模範とも考へられるであらうが、それにしても、これの原著である「聊齋志異」といふ本は、たとへその文章が頗る美妙であるにせよ、支那文學の最高の部類には入らないものである。

レッグ博士の勞作に次いでは、バルフオア氏最近の譯にかかる「莊子南華經」があるが、これはたしかに非常な野心作である。我々はこの作の發表を聞いた時には、イギリス人が翰林院に入つたといふ話を聞いた以上に一種の期待と愉悅を感じたものであることを告白する。この「南華經」は支那人の間では、支那文學最高の作品の中でも最も完美なものの一つと認められてゐる。これが西曆前二世紀に現れて以來、その支那文學への影響は孔子及びその分派の作物の影響に殆ど劣るところがなく、またこれが後代の詩及び創作文學の用語や精神に與へた影響は、哲學書に對する四書五經の影響と同じ位に獨占的である。ところがバルフオア氏の著作は全然飜譯になつてゐない。全くの誤譯に過ぎないのである。かう言へば、バルフオア氏多年の苦心に成る著作に對して苛酷な、そして筆者としては大膽な批評になることは承知であるが、しかしそれを敢て言ふ所以は、筆者の判斷の正しいことが證明されると思ふからである。筆者が莊子哲學の眞意解明の問題を引つ提げて論爭しようとしてもバルフオア氏は恐らくそれを肩しとせられないであらう。しかし、――「南華經」最近の編者林西仲の序文から引用すれば、――「凡そ本を讀むには先づ一字一字の意味を理解することが必要で、然る後はじめて文意が分り、次には各段落の排列が知られ、最後に全章の中心命題に到達し得るのである。」ところ

でバルフオア氏の飜譯を見ると、氏が一字一字の意味を理解せず、それを含む文句をも正解せず、また各段落の順序にも不注意であつた證據がどの頁にも現れてゐる。もし我々の臆測の當つてゐることが證明せられるならば、――これは單に文法や語序の法則に關するものであるから、證明は容易であるが、――バルフオア氏は各章全部の意味及び中心命題を見失つてゐることが極めて判然として來るであらう。

とにかく現在のところ、支那學者の中の第一人者としては先づ廣東のフアーバー師を擧げたい。フアーバー氏の勞作が他の人々のものに比べて一層學術的價値があるとか文學的に更に優れてゐるとかいふのではないが、その書いた一句一句を見ても、現今の他の學者に見られないやうな文學的ならびに哲學的理論の把握が示されてゐるのである。その理論が何であるかは、更に本篇の續きにこれを讓り、支那學の方法、趣旨及び目標について述べて見たいと思ふ。

支那學（その二）

フアーバー氏の言ふ所によれば、支那人は學問の研究について何等組織的方法を有してゐない。もつとも、支那古典の一つである「大學」――これは大抵の外國人學者からは平凡陳腐な本と考へられてゐるが、――の中には、學者の組織的研究の順序に關して一つの連鎖式が掲げられてゐる。支那語研究者も恐らくこの本に示されてゐる定石に從ふのが最良の道であらう。即ち、先づ個人を研究し、個人より進んで家庭へ、更に家庭より天下國家へと研究して行くことである。

然りとすれば先づ第一に、支那人の個人としての行動理論について正しい知識を得るやうに努めることが、學徒にとつては必要不可缺である。第二に、これらの理論が支那民族の複雜な社會關係や家庭生活において如何に應用し實行せられてゐるかを察知することである。かうして第三には、もはや支那といふ國の政治や行政機構に注目してこれを專攻することが出來るやうになるであらう。但しここに述べた案はただ一般的大綱に過ぎないのであるから、これが完

全なる實行には殆ど全生涯の獻身と精力の集中を必要とするであらう。ともあれ我々は、多少とも前記の如き理論を身につけた人でないならば、その人を支那學者と呼んだり、或はその學識を讃へたりすることは斷りたいものである。ドイツの詩人ゲーテも言つてゐる、「人間の事業においては、大自然の事業と同じく、何物にもまして眞に注目するに値するものがあるとすれば、それは意欲である」と。されば國民性の研究においても亦、單にその民族の行爲や慣習ばかりでなく、その觀念や理論にも注意を拂ふことが何よりも重要である。即ち彼等の善惡、正邪、美醜、賢愚に對する考へ方を知ることである。我々が、支那研究者は個人の行動の理論を研究しなければならぬといふ意味もそこにある。言ひ換へれば、支那國民の理想を摑めといふことである。それにはどうすればよいかと言へば、答へは、その國民の文學を研究することで、この文學の中には民族性の至善至高の半面はもとより、最惡の半面の姿も亦映し出されてゐるからである。そこで、外國人が支那語を研究する際に注意すべき一つの目標は、標準的な支那の民族文學であるといふことになる。研究の準備としては色々なものが必要であらうが、それはただこの一つの目標に到達せんがための手段として役立つに過ぎない。では次に、如何にして支那文學の研究をなすべきかを述べてみよう。

或るドイツ人がかう書いてゐる、「ヨーロッパの文明はギリシヤ、ローマ及びパレスチナの文明に依存してゐる。而してインド人やペルシヤ人とヨーロッパの民族とは、同じアーリアン系であるから、互に關係が有り、また、中世時代におけるアラビア人との交渉がヨーロッパの文化に及ぼした影響は、今日に至るもなほ全く消滅してはゐない」と。ところが支那人の場合には、その文明の起源及び發達は、ヨーロッパ民族の文化とは全く異なつた基礎の上に立つものである。それ故、支那文學を研究する外國人は、基本的思考や觀念の相違から生じて來る幾多の難關に遭遇するであらう。そこで彼は、かうした外國的な思考や觀念を自分のものにしただけでは不充分で、何よりも先づそれに相當するヨーロッパ語を求め、もしそれがない場合には、かうした思考や觀念を分解してみることによつて、それらが普遍的な人間性の何に屬するかを注意することが必要となる。例へば支那の古典に始終現れて來る「仁」「義」「禮」であるが、これは概ね "benevolence," "justice," "propriety" と英譯されてゐる。ところが、この英語では、前後の文脈に照して見た時適當でないやうに思はれる。支那語の持つ意味が充分に持たされてゐないのである。英語ならば "humanity" あたりが支那語の「仁」に最もよく當てはまるであらうが、しかしさうだとすると "humanity" といふ語は英語における慣用的の意味

とは異なるものと解されなければならぬ。更にまた大膽な譯者は、バイブルのいはゆる "love" (愛) と "righteousness" (正義) とをこれに當てるであらうが、これも亦語の意味とその言語の慣用とを兩方顧慮しなければならぬ點では大同小異である。しかるにこの場合、これらの語を分解して、その有する基本的觀念を普遍的な人間性に歸納することにより、直ちにその意味を十分に把握することが出來る。それは何かと言へば "the good" (善) "the true" (眞) "the beautiful" (美) である。

なほまた、かりにも一國の文學を研究するといふ場合には、組織的に、一個の脈絡ある個體として學ぶべきであつて、これまで多くの外國人學者のやつて來たやうに斷片的に、計畫も秩序もなしにやつたのではいけない。マシウ・アーノルドも言つてゐる、「あらゆる文學——人間精神の歷史のすべて——か、さもなくば只一篇の偉大なる文學作品を、脈絡ある個體として理解することによつてのみ、文學の眞の力が感得されるのである」と。しかるに、我々の見るところでは、外國人には支那の文學を一つの個體と見る認識が如何に缺けてゐることか。從つてまた、その眞意を掴むことが如何に乏しいことか。それを知ることが、まつたく如何に僅少なことか。外人の手にかかつて支那文學が民族性を解く一つの力となることが如何に少いことか。

レッグ博士やその他一二の學者の勞作を除けば、ヨーロッパの人たちは主として小說の飜譯を通して支那の文學を知り、しかもその小說が最上のものならばともかく、小說としても極く平凡なものばかりである。かりに外國人が英文學を論ずるに當り、ローダ・ブロートン女史の作品どころの、ニキビ少年や女中層を相手とする小說ばかりを讀んでゐたとしたらどうであらう。ところでサー・トマス・ウエードが、支那人は「知性が稀薄」だと言つて癇癪を起した時に、その心に浮んだものは恐らくかういつた種類の支那文學であつたであらう。

もう一つ支那文學に對して屢々浴びせられる變つた批評は、それがあまりにも道德一點張りだといふことである。かくして支那人は、一面においては過度の道德性を責められてゐるが、同時にまた大抵の外國人は、支那人が嘘吐きの國民だといふことに先づ意見が一致してゐる。しかしこれは何も前に述べたやうな三文小說のせゐばかりではなく、從來支那學者によつて飜譯されたものが專ら儒教の經典であつたといふ事實によつて說明できる。しかも、かうした書物の中には道德的なもの以外の數多の事柄も勿論含まれてゐるのであるから、たとひバルフオア氏の言を如何に最眞目に見たところで、これらの書物に含まれた「有難い教へ」は、決して從來判斷されてゐるやうに「實益的、世間的」ではないと思ふ。ここには只次の二句を掲げ、

バルフオア氏が果して眞にそれを「實益的、現世的」と考へられるかどうかを借問したい。孔子が王孫賈の問ひに答へて言つた、「天に對して罪を得た人間は、もはや何處へ行つて禱らうにも禱る所がない」（「獲罪於天、無所禱也」）。また孟子の言にもかういふのがある、「自分は生を愛するが、また義をも愛する。しかし、もし兩方を全うすることが出來なければ、むしろ命を捨ててでも義を選ぶ」（「生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而取義者也」）。

以上ととさら脇道へそれたのも、バルフオア氏の判斷に對して抗議するにはそれがよいと考へたからであつて、「古人への奴隷」とか「詭辯の名人」とかいふやうな辛辣な用語は、かりにも哲學的な著作においては滅多に用ひるべきでなく、まして支那人の尊崇措く能はぬものに對してそれを用ひるなどは尚更であると考へるからである。恐らくバルフオア氏は南華の豫言者を讃美するの餘り岐路に迷ひ込み、老莊の方が正統儒教に優ることを强調せんがためにこの樣な言辭を弄したのであつて、やがて冷靜に返ればその非を悟られることと思ふ。

そこで本論に返るが、先に、支那文學は脈絡のある個體として研究しなければならぬと言ひ、なほ、ヨーロッパ人は支那文學とし言へば專ら儒教の匂ひのする文獻をそれと認め、これを判斷の基礎にしがちであるといふ點を注意しておいた。しかしながら、實際のところ、支那人の

文學的活動は孔子の著作の時代にはまだやうやく開始したばかりであつて、それ以後十八歷朝を經過して二千年以上に及んでゐるのである。孔子の時代には、著作の文學的形式などはなほ極めて不完全にしか理解されてゐなかつた。

ここでことわつておきたいが、およそ文學の研究において注目すべき、而も從來支那語を研究する外國人の全く閑却してゐた一つの重要な點は、その文學的作物の形式である。詩人ワーヅワースも言つてゐる、「たしかに素材（マター）といふこともある、しかしそれにしても素材（マター）は常に樣式（マナー）から生れるのだ」と。ところで、孔子の名前が聯想されるやうな初期の文獻は、文學的形式といふ點においては、どう見ても完成の域を隔ることが遠いのは言ふまでもない。それが古典的乃至は標準的作品と見なされる所以は、その文體が古雅であるとか文學的形式が完成してゐるとかいふよりは寧ろその內容をなす素材の價値によるのである。宋の蘇東坡の父（老泉）も、孟子の中の對話には一種の散文體の形成に近いものが認められると言つてゐる。もつとも、支那の文學的作物は、散文にせよ詩にせよ、それ以後幾多の形式や文體に發展したのであつた。例へば西漢の文章が宋代の文章と異なることは、恰もベーコン卿の散文がアディスンやゴールドスミスの散文と異なるのと同じやうなものである。また六朝時代の詩における野性的な誇張と

激越な用語が、唐代詩人の純情、活氣、才華と同樣でないのは、恰もキーツ早年の弱氣で未成熟な作風が、テニスンのあの强くハツキリした、的を外さない貫祿と同樣でないのに似てゐる。

この樣に、以上述べた如く、支那民族の基本的な理念や觀想を體得したならば、そこで今度は支那民族の社會的關係へと研究の歩を進め、これらの理念が如何に適用され實行されてゐるかを調べる段取りとなるのであるが、しかし一民族の社會制度や風俗習慣は決して茸の如く一夜の中に生れ出るものではなく、それが現在のやうに發達し形成されるまでには幾世紀もの長い期間を經てゐるのである。從つてその民族の歷史を研究することが必要になつて來る。ところで支那の歷史はヨーロッパの學者には殆どまだ知られてゐない。最近刊行されたブルジェ氏のいはゆる「支那史」の如きは、文明民族たる支那人のことを書いたものとしては恐らく最惡の歷史であらう。ブルジェ氏著の歷史のやうなものは、何かホッテントット見たいな野蠻民族のことを書いたものならばまだまだ容赦も出來よう。かういふ支那史が出版されたといふ事實は、ヨーロッパ人の支那知識がなほ如何に不完全なものであるかを物語るに過ぎないのである。さういふわけで、支那民族の歷史を知ることなしにはその社會制度について正確な判斷を下すことは不可能である。ウイリアムズ博士の「ミドル・キングダム」やその他の支那關係書

は、この邊の知識を缺いてゐるために、學者の役に立たないばかりか一般大衆にとつても却つて誤解の種となるものである。そのほんの一例——支那民族の社會的儀禮——を擧げてみよう。支那人はたしかに儀式張つた民族であり、それが儒教の影響から來てゐることは事實である。そこでバルフオア氏の如きは、虛僞に滿ちた儀式生活の尊重を思ふ存分に批評することになるのであるが、しかしながら、ヂヤイルズ氏のいはゆる「御辭儀本位の外形的禮節」も、實は普遍的な人間性の中に深く根ざしてゐるものであつて、それはつまり我々が美的感覺と呼ぶ所の一種の人間味に根ざすものである。孔子の弟子の一人がかう言つてゐる、「禮節の實踐に當つて大切なのは自然的なことである。これとそは先王の行ひの中に見出される眞の美しさである」と。また四書の或る所にこんなことも言つてある、「禮節はただ崇敬の表現に過ぎない」(ゲーテの「ウイルヘルム・マイスター」の中のいはゆる畏敬(エールフルヒト))。そこで分る通り、一國民の風俗習慣を判斷するには、その民族の道德理念を知つてこれに立脚せねばならぬことは明白である。また、一國の政治や行政制度の研究——これは前にも述べたやうに、學者としてはその研究の最後の段階に殘しておくべきであるが——これも亦その民族の哲學的理念を理解し且つその歷史を知つた上でなくてはならない。

我々は本篇の結論を『大學』――外人が平凡陳腐と考へる本――から引用することにしよう。あの本にはかう言つてある、「古ノ明德ヲ天下ニ明ラカニセント欲スル者ハ先ヅ其ノ國ヲ治ム。其ノ國ヲ治メント欲スル者ハ先ヅ其ノ家ヲ齊フ。其ノ家ヲ齊ヘント欲スル者ハ先ヅ其ノ身ヲ脩ム」と。これこそは支那學の眞義である。

――「支那學」に關する本篇は上海發行の「ノース・チャイナ・デーリー・ニュース」のために一八八四年に執筆掲載せられたもので、正に三十年前のことである！

附錄

暴民崇拜教

――大戰とその出路

恐るべきはフランスの災厄、階級は自らを慮れど
それにもまして大衆の、肝に銘ぜし眞理あり
階級は粉碎されぬ、されど誰か大衆を護らむ
大衆は大衆に對ひて、あゝ互にたけり狂へり

――ゲーテ

ケンブリッヂ大學のロウズ・デイツキンスン教授は、「大戰とその出路」と題する滔々たる論文において、かう述べてゐる、「未來（ここではヨーロッパ文明の未來の意味）がともかくも形作られるまでには、平民男女たちが、つまりイギリスやドイツやその他すべての國において筋